

セ レ ク の 誕 生

—— エジプト王によるメソポタミア扶壁の転用 ——

中 野 智 章

は じ め に

1 研究の目的

1950年代初めに Frankfort が述べた、紀元前4千年紀末頃のメソポタミアからエジプトへの影響は、メソポタミアの Jemdet Nasr 文化に見られる文化要素の多くが、エジプトの先王朝時代末から初期王朝時代に掛けて見られることを指摘したものであった [Frankfort 1951, 小野山 1975, 1996, 1997, 1999]。中でも注目されたのは、メソポタミアの神殿に用いられた扶壁がエジプトの記念建築物に用いられると共に、王名を記す枠である「セルク」にも意匠として描かれたことである。ここで言う「扶壁」とは「連続する凹壁」を指し、メソポタミアでは、元来神殿における壁の強度を増すために一部を突出させ、それが次第に複雑化したとする見方が一般的である [Damerji 1973]。

外来の文化要素が、古代エジプト社会の中心をなす王の葬祭やその象徴に用いられていたというこの指摘は¹⁾、エジプト統一国家の起源を問い直す、大きなきっかけとなった。こうした類似性は、以前にも謳われていた、シュメール人によるエジプト国家の設立を意味するという説を再燃させると共に [Petrie 1939]、シュメールからの文化的刺激を受けてエジプトの第1王朝が開始されたとする説などを提出させるに至ったのである [Kantor 1965]。その後、デルタ地帯における調査の飛躍的進展等により、先王朝時代末から初期王朝時代に掛けての文化の連続性の理解にかなり大きな変更があって、外来勢力によるエジプト国家樹立の可能性は大きく後退することになった [Köhler 1992]。ところが、なぜ扶壁が王の象徴や葬祭建築に用いられるようになったのか、という点については未だ明確な解答が得られていない。もしかすると、そこには国家の形成過程において作用した、何かしら巨大な力の動きが如実に反映されているのではないか。エジプトでは、葬祭や宗教など様々な文化要素の基盤が文明の初期段階にほぼ完成していたと考えられているが、扶壁受容の過程を明らかにすることで、エジプト文明の起源、あるいは文明が本質的かつ潜在的に有していた性格を探る手掛かりが、何か得られるのではなからうか。

1) 王は世界を創造し、秩序(マアト)を維持する者とされ、社会の中心的存在と位置付けられていた。詳しくは O'Connor & Silverman (eds) 1995 を参照。

本稿では、そのように王権に最も密接しながら、導入過程がほとんど知られていない扶壁建築に焦点を当てる。ただし、今日知られている扶壁のほとんどは、王が葬祭を司った場所とされる Abydos の葬祭周壁、並びに当時の王族を埋葬したと考えられる Saqqara 墓地から得られたもので、いずれも第1王朝の開始以降に建造されたものでしかない。また、同王朝の首都 Memphis は未だ明確な形で確認されておらず [Jeffreys & Tavares 1994; Wilkinson 1999: 357-362], そこに存在したであろう王宮については全く分かっていない。一方、扶壁を描いた王名枠であるセレクは、先王朝時代の末期、Naqada III期 (約3200-3000 BC) の段階からその存在が確認され、第1王朝に入っても土器等に記され続けた。なお、Naqada III期を前、中、後の3期に区分した場合、第1王朝は後期から始まったとする見方があるが、現段階では、第1王朝の初めを後期の後に来ると考えている。

2 研究の方法

したがって、メソポタミアからとされる扶壁導入の経緯やその意味を考察するに当たっては、実際の建築よりも出現時期が早い、セレクに見られる扶壁意匠を重視して研究を進めることが不可欠となる。セレクとは王名を記した長方形の枠を言い、枠内の上部には王名、下部には当時の王宮の正面を表すとされる扶壁意匠 (別名「王宮ファサード」²⁾) が描かれ、通常、枠の上には王の守護神 Horus が止まった姿で表されている [Wilkinson 1999: 374]。一般的には、王が隼の神 Horus の化身であり、かつ王宮にいることを示した王の権力を象徴する意匠と考えられているが、実際の王宮からの扶壁出土例は、上エジプトの Hierakonpolis 遺跡から出土した、第1王朝の王宮址ではないかとされる遺構の門の部分しか存在しない [Weeks 1971-2]。したがって、セレクに記された扶壁が本当に王宮を示すのかどうかについては、幾らかの疑念を持つ研究者も少なくなく、近年では O'Brian が何かしら「ドア状」の構築物から派生した意匠と述べ [O'Brian 1996: 135], Wignall は王の儀礼を催すために用いられた、不特定の大型周壁がその源であるとし、王の居住を意味する王宮とは異なるとしている [Wignall 1998: 103]。この種の議論が絶えない理由は、扶壁建築の受容過程が明確でないのもさることながら、セレクの起源も曖昧だった点が大きく影響していると言えよう。ところが、第1王朝の王墓が存在する Abydos で近年明らかになった先王朝時代末期の墓地資料からは、このセレクの意味や変遷について新たな見方を得ることができ、王が当時の王宮にいることを示すに過ぎないとした、従来のセレクに関する定説を修正することができそうである。

あらかじめ簡単に結論を要約しておこう。一連の扶壁関連資料から見限り、初期エジプトの王権を象徴するセレクの意味や成り立ちに関して、これまでには示されていなかった2つの新たな見方を付け加えることができる。

2) 「王宮ファサード (Palace Facade)」という呼び方がエジプト学者の間では一般的なのもの、首都 Memphis の王宮は未だ確認されていない。そこで本稿では、起源とされるメソポタミアの建築様式に対して用いられる「扶壁」という語を使用する。

第1は、王名を記す枠として知られるセレクは、上エジプトの象徴である Horus 神と下エジプトの象徴である扶壁とを合体させた、2国統一の意匠であるという考え方である。従来定説として採り上げられてきた、王宮にいる Horus 神としての王を示す意匠であるという考え方や、あるいは Arnold が近年提唱している、聖なる場所にいる神々の内、Horus 神が最上位に位置することを示す意匠である [Arnold 1997]、といった考え方などは、むしろこの2国統一の意匠が編み出された後に付加された意味と捉えられるべきである。

第2は、扶壁建築はメソポタミアからまず下エジプトに伝わり、ついでそれを受け入れる精神的素地を持った、上エジプト側に採用されるに至ったとする見方である。近年発掘された Abydos の U-j 号墓 (Naqada III 期前期) について、そのプランを詳細に観察してみると、後に扶壁が有することになる、被葬者のカー (生命維持力) の移動を意図したスリットの存在が明らかになる。第1王朝を興した This の首長達は、扶壁建築を構成する壁龕をそのスリットと同義のものとして捉え、比較的大きな心理的抵抗を持たずに自らの建築に採り入れることができたのではないだろうか。

以下、これまでの調査で得られた扶壁に関する資料等を扱いながら、セレクの成立過程を通時的に考察する。この部分は、初期王朝時代における扶壁建築が、第1王朝の初めにメソポタミアから直接伝播したのではなく、エジプトにおける先王朝時代末から初期王朝時代に掛けての、文化の連続性の上に起こった事象であることを再確認するために重要である。ついで、近年明らかになった先王朝時代末期の Abydos U-j 号墓出土の新資料を用いながら、第1王朝開始の際に、なぜ上エジプト出身の王が扶壁を葬祭建築に採用するに至ったのか、そこにはどのような社会的背景が存在したのかを論じてみたい。そして最後に、セレクの誕生が物語る国家形成過程の一面を考察することにより、メソポタミアからの文化要素流入が、エジプト国家の建設に結果としてどのように作用したのかを述べてみたい。

I 国家形成期における扶壁関連資料

1 土器に記されたセレク

先王朝時代のセレクに関する最大の情報源は、土器である。近年その編年を再構築した Brink は、自ら収集した資料が110点あるとし、その中から、形態的特徴で時期比定にある程度信頼のおける、完形の土器に刻まれたセレクを計24点示している [Brink 1996]。彼の示した編年については後述することとし、ここではその後発表された新資料も加え、どのようなタイプのセレクがこれまでに出土しているのかを見ていきたい (図1)。

最古のセレクは、先王朝時代末の Naqada III 期中期 (約 3150-3100 BC) に見出すことができる³⁾。Abydos にある、第1王朝王墓地のすぐ北に位置する先王朝時代末期の墓地、

3) 先王朝時代後半を特徴付ける Naqada 文化期の時代区分に関しては、その先駆となった Kaiser の論文を始めとして [Kaiser 1957]、多くの研究があり、研究者間でその細分は異なっている。しかし、

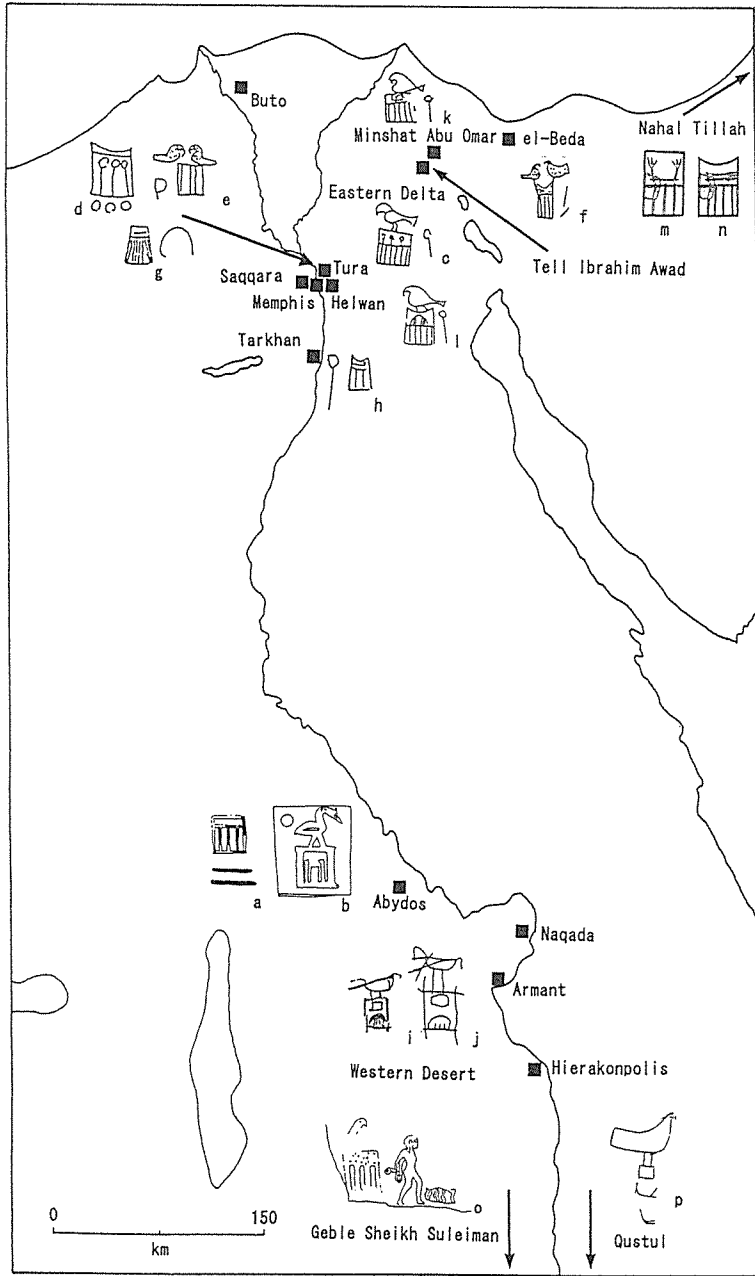


図1 先王朝時代末期における代表的セレクの出土分布

Uのs号墓より出土したセレクは(図1-a), 広口で円筒型の土器にインクで描かれていた[Dreyer 1998: 88, Abb. 59-d, e, g, h]。器体の胴部に記された縦長の長方形枠には, 上部に僅かな空間, 下部に扶壁建築を示すと考えられる意匠が縦線で描かれている。扶壁を示す線の数は一定せず, Horus神は止まっていない⁴⁾。

また, 同じU墓地のj号墓から出土した象牙製小札3点にも, セレク状の表現が見られる(図1-b) [Dreyer 1998: 128, 130-Abb. 80, 127-129]。ただし, この意匠上に止まった鳥はHorus神ではなく, サギを示すと考えられるため, 時期はs号墓より50年程古いものの(Naqada III期前期: 約3200-3150 BC), 最古のセレクとは見なされていない。そのうち1点の小札は縦1.7 cm, 横1.5 cm, 厚さ0.2 cmで, 扶壁状のモチーフが底辺から伸びる3本線で描かれ, 両脇の線が細く高いのに対して中央線は太く低く表現されている。s号墓から出土したセレクのように, 枠内を2つの空間に分割する形は採っていない。他2点の小札では, 底辺から太く伸びた中央線1本のみで扶壁意匠が表されている。他には, 容器の内容物やその数量を示すとされる図像等が刻まれた同様の札が, 約160点発見されている。

次にセレクが見られるのは, Naqada III期後期(約3100-3000 BC)の段階である。東部Delta地帯からは, 出土地は明確でないもののHorus神を示す隼を上へ戴くセレクが発見されている(図1-c)。枠の上半分には3つのhedju(棍棒頭)のサインが, 下半分には扶壁を示すと思われる意匠が縦線で描かれている[Fischer 1963: 44-fig. 1, pl. VI-a, c]。同様のセレクは, 第1王朝に首都が置かれたとされるMemphisの, 近郊に位置するTuraでも出土しているが, Horus神は止まっておらず, しかもそこではhedjuのサインがセレクの下半分を占め, 扶壁の意匠は記されていない。セレクの下にも円が3点描かれ, 独特の格好を呈している(図1-d) [Junker 1912: 32, 47, fig. 57. 1-2]。そこでWilkinsonは, 単に王家を示すに過ぎないか, もしくは東部デルタの王であるなら, 下エジプトでしか発見されていない点が重要と述べている[Wilkinson 1999: 56]。

また同じTuraや(図1-e) [Junker 1912: 47, fig. 57.5], Sinai半島西北端のel-Bedaからは, Horus神を2羽伴ったセレクが出土しており(図1-f) [Clédat 1914], これを下エジプトに拠点を有した先王朝時代後期の支配者名と考える者もいる[Way 1993: 101]。ここでは, Horus神が互いに向かい合う形でセレクの上辺両端に止まり, 体には斑点が描かれる。扶壁は縦線書きで, それがセレクの全体を占めるものや, 上半分の空間には斑点を描くものがある点が興味深い。更に, TuraからはNy-Horという名を有するセレクも出土

↘ 現代から約5000年前の出来事に対し, 数十年単位で時期区分を行うことは非常に困難と考えられるため, 本稿ではそれらの細分を大きく捉えて基本的に初期・中期・後期の単位を用いる。近年発表されたWilkinsonの論文も同様の方法を採用しており[Wilkinson 2000], 筆者もこれに倣った。
4) なお, このセレクの下には「上下エジプト」を意味するt3.wjらしき文字が記されている。調査者のDreyerはむしろ上エジプトにおける東西を示す文字だったのではないかとの考えも述べているが[Dreyer 1998: 89], 現段階での断定は困難である。

しているが(図1-g) [Junker 1912: 47, fig. 57.3-4], Wilkinson は単に Narmer の省略形ではないかとの考えを示している [Wilkinson 1999: 54]。Narmer は第1王朝の始祖、ないしはその直前の第0王朝最後の王とされる人物である。Tarkhan 出土のセレクも同様である(図1-h) [Petrie 1914: pls VI, XX.1]。ただし、土器自体は共に Narmer より少し時期が早いとも考えられるため [Brink 1996: 147], 初期の支配者を示したものである可能性も捨てきれない。いずれも Horus 神は上に止まっておらず、セレク内の王名は横線1本で表され、扶壁意匠は縦線書きである。

他には、Armant 付近の西部砂漠にある2つの岸壁碑文が、他の王名を示唆している。Horus 神を頂くこのセレクは、王名は不明だが、南部に位置することから見て Hierakonpolis の首長のものと推測される(図1-i, j) [Wilkinson 1995]。描写は全体に稚拙で、Horus 神が止まったセレクの内部には、王名部分に長方形、扶壁意匠は半円形の櫛状を呈しており、同様のセレクは、Horus 神は戴かないものの東部砂漠の岸壁碑文にも記されている [Winkler 1938: 10, 31]。ここは Qena から紅海へのルート上にあるため、Wilkinson は後期先王朝時代から初期王朝時代に掛けて定期的に行われた、エジプトによる遠征活動に関係するとの考えを示している [Wilkinson 1999: 56]。

なお、Hierakonpolis から出土した棍棒頭で著名な Scorpion 王のセレクは、Minshat Abu Omar で発見されているが(図1-k) [Wildung 1981: 37, fig. 33], 王名については第1王朝初代の Aha 王とする見方も存在する [Wildung 1981: 35]。セレク内には一見渦巻状の文様が王名の部分に記され、扶壁意匠は縦線書きである。同様のセレクは Tarkhan からも2点発見されているが [Petrie et al. 1913: pl. LX; Petrie 1914: pl. XL], この Tarkhan 出土の王名に関しては、Dreyer が Crocodile と読むべきとし、王位の篡奪者ないしは This の Ka 王と同時期に統治していた人物かもしれないとの考えを述べている [Dreyer 1992]。これを受けて、先の Minshat Abu Omar の例も征服者 (Crocodile) と呼ぶべき案を Brink が提出しているが [Brink 1996: 147], 多くの支持は得られていない。

一方、Narmer の前任者である Ka 王のセレクは、北東デルタ地帯の Tell Ibrahim Awad から [Brink 1992: 53, n. 14], 上エジプトの Abydos に至るまでの幅広い地域で出土している。Horus 神の止まったセレクの中には、両手を上げた Ka の文字で王名が記され、扶壁意匠の部分は縦線書きである。Helwan の墓では同王のセレクを刻んだ壺が2点出土し [Saad 1947: pl. LX], 当時既に首都 Memphis が存在した可能性も想定されている(図1-l) [Wilkinson 1999: 58]。彼の名は Abydos だけでなく [Petrie 1902: 3, pls. I-III], Tarkhan 出土の円筒土器にも記されている [Petrie et al. 1913: pl. LXI]。

またエジプトの外にも目を向けてみると、近年ではパレスティナ地域からもセレクが出土しており、第1王朝の直前から王朝半ばに掛けてエジプトが支配した領域を示唆する証拠として扱われている。Nahal Tilah では、Ka 王と Narmer 王のセレクが発見された(図1-m, n) [Levy et al. 1997: 18-21]。円筒印章に記されたセレクに Horus 神は見られないが、

いずれも断片出土のため、詳細は明らかでない。

そして最後に下ヌビアの Gebel Sheikh Suleiman にある岩窟碑文は、かつて Djer 王期（第1王朝2代）の遺構と考えられていたが、現在では先王朝時代の末に比定されている。セレクは一番左端に描かれ、王名部分に10粒ほどの点、扶壁意匠部分に縦長の長方形が3個描かれている（図1-o）。上部にはHorus神の頭部が見え、その手前には両手を後ろ手に縛られた捕虜が立った姿で表される。セレク内に名前は記されていないが、恐らくHierakonpolisに拠点をおいた、上エジプトの王との意見が出されている [Wilkinson 1999: 54]。なお同じヌビアの Qustul L 墓地2号墓から出土した土器には、調査者のWilliamsが下ヌビアの王Pe-Horとした王名らしき文字が記されている [Williams 1986: 149, Pls. 76-77]。太い胴部に小さな頭部が載るこのHorus神らしき像は、正方形に近い四角の上に止まっており、下には文字らしき線刻が見られる（図1-p）。おそらく、Bainesの言うようにエジプトの影響を受けた地方君主を示すのであろう [Baines 1995: 104-105]。

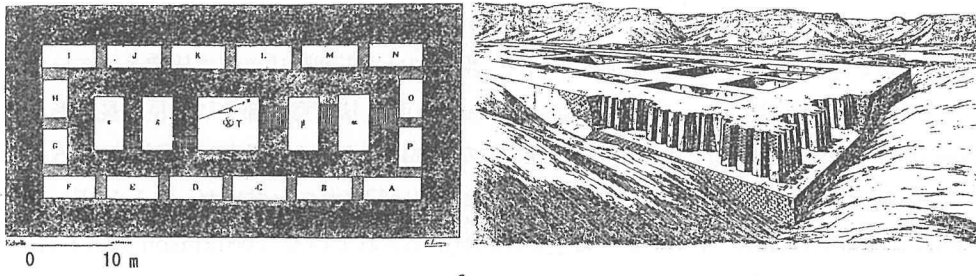
2 扶壁建築物

これに対して実際の建築に扶壁が現れた最古の例は、第1王朝開始前後に建造された、NaqadaのNeithhotepを埋葬したとされる墓である [Morgan 1897]。ここではその他注目すべき遺構にもふれ、セレクとの比較材料にしたい（図2）。

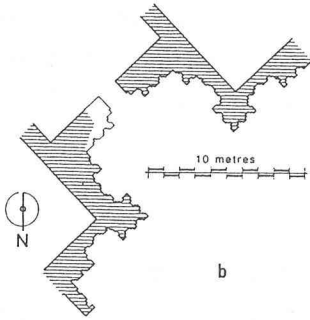
この墓は、規模は約54 m x 27 mと大型なもの、地下構造は有していない（図2-a） [Morgan 1897: 155-Fig. 518, 157-Fig. 521]。中心部には、玄室を中心とした部屋が直線上に5部屋、その全体を囲む副葬品室が16部屋設けられている。扶壁を構成する大型壁龕は長軸に13、短軸に6つずつ等間隔に設けられ、その間に小型壁龕が同じく等間隔に3つずつ付けられている。大型壁龕の幅は最も広いところで2 m弱、小型壁龕のそれは約30 cmである。一方内部の部屋に対する扶壁の厚みは、3~4 mもある。更に、大型壁龕内には小型壁龕が5つ掘り込まれており、それも凸状を呈するなど、造作が非常に細かいのが特徴的である [Vandier 1952: 634-637]。

これに対して王宮で扶壁が確認されたのは、第1王朝に属すると考えられる、Hierakonpolis出土の門である（図2-b） [Kemp 1989: 40-Fig. 11]⁵⁾。同地は、王の守護神であるHorusの本拠地である。出土したのは全体の幅が約20 m、奥行約10 mの扶壁で、NaqadaのNeithhotep墓の場合と同様に、大型と小型の壁龕で壁が構成されていた。大型壁龕の幅は1 m 80 cmで奥行が1 m 20 cm、小型壁龕の幅は60 cmで奥行は40 cm程である。基本的には、大型壁龕1つに対して小型壁龕が2つ等間隔に並ぶ形で配置されているが、中には、凸型の小型壁龕を縦に半裁した形のものも見られる。この場合にも、大型壁龕内には小型の

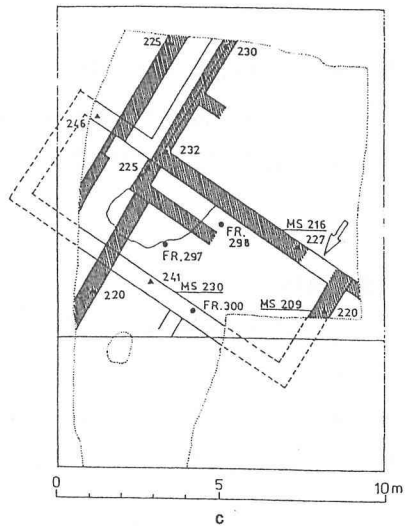
5) 当時の首都は現在のCairo近郊にあるMemphisに置かれていたと推測されているが、王宮は他の拠点にも設けられ、王訪問時の施設として利用されたと考えられる [Baines 1995: 123]。



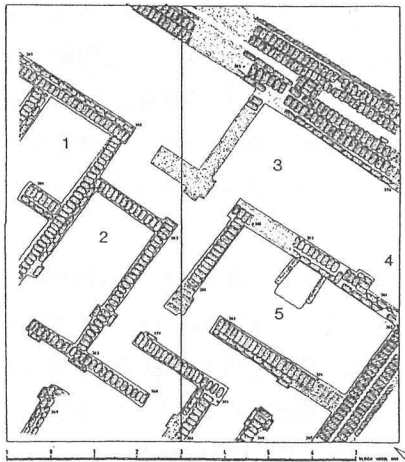
a



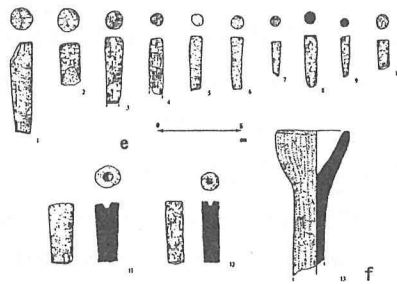
b



c



d



e

f

- a Naqada 出土 Neithhotep 墓
- b Hierakonpolis 出土王宮の門
- c Tell Ibrahim Awad 出土神殿遺構
- d Buto 出土大型建造物遺構
- e, f Buto 出土 Uruk 型土製釘

図2 先王朝時代末期から初期王朝時代に掛けての扶壁建築物および関連遺物

壁龕が5つ掘り込まれ、Neithhotep 墓の場合と同様に造作は細かい。ただし、壁は厚い所でも2m弱、薄い所では80cm程しかなく、この点は調査者が町の壁でなく王宮と判断する1つの材料になっている [Weeks 1971-2: 31]。

他には、先王朝時代末から下エジプトの中心地として栄えた Buto において、近年ドイツ隊による発掘調査が行われているものの、扶壁構造を有する建物が出現するのは第2王朝以降でしかない。しかも、その構造は直線的な壁の所々に短い控え壁的なものが付けられているのみで、Naqada の Neithhotep 墓や Hierakonpolis の王宮に見られる複雑な扶壁とは建築様式が異なっている (図2-d) [Way 1992: 6-Fig. 5]。ただし、先王朝時代末の層からは、シュメール及びユーフラテス川上流の Uruk 期の神殿に用いられたものと同様の粘土釘が2種類、計13点出土して話題となった [Way 1992, 1997: 114, Tafel 57; Strommenger 1980: Abb. 16, 24]。第1の種類は12点からなり (図2-e)、チューブ状で断面は円形、長さは約1.5~6cm。質の良いナイル泥土を用いており、焼成は良好である。どれも片方の端がもう一方よりも細く、その部分の破損が激しい。太い方の端に円形の窪みを有するものがあり、その端の直径は6~8mmである。色調は明るいものから暗いものまで、全体的に褐色系を呈する。第2の種類は1点のみの出土で (図2-f)、釘状を呈し長さは約9cm。同じくナイル泥土を用いる。漏斗状に広がる頭部の直径は約5cmで、そこにつく窪みの直径は約3.6cm、深さ2.8cmとなっている。色調は明るい褐色を示し、磨き痕が外面に見られる。

この粘土釘は、Uruk では神殿の外面を飾る彩色壁を構成する際に用いられたもので、Buto では地元の胎土を利用して制作されている点が興味深い。なお、近年の調査では穀物倉庫に関連すると思われる平行状の壁も初期王朝時代の層より出土しているが、ここでも扶壁は用いられていない [Faltings et al. 2000]。

さらに、下エジプトでは Tell Ibrahim Awad でも Naqada III 期後期から中王国時代に亘る、大規模な神殿址と見られる日乾煉瓦建築が発見されている (図2-c) [Eigner 2000: 32-Fig. 8]。だが扶壁は用いられておらず、出土したのは厚さが1mに満たないL字型の壁が中心である。ここでは、Buto 遺跡で出土したような控え壁は出土していない。

II 建築と図像における扶壁出現のギャップ

以上のように、現在までに得られている資料から判断すると、扶壁建築が実際に現れたのは第1王朝の開始前後と推察される。ところが扶壁を表すとされる意匠そのものは、それより約200年程前の Naqada III 期前期、ないしは中期の段階で既にセレクに描かれているのである。その間のギャップは、どのように説明すれば良いのだろうか。

1 建築

まずは建築の詳細に注目してみよう。扶壁が確認された最古の墓である Naqada の Nei-

thhotep 墓は、地上の上部構造のみで構成される。扶壁は、大型壁龕と小型壁龕とが巧みに組み合わせられた精巧なもので、壁は 3～4 m 弱と非常に分厚い。玄室を中心に部屋が 5 室直線状に並んだ構成は、Abydos の同時期の Aha 王墓等のプランに近く、そこに厚い扶壁が被さった状態は、さながらメソポタミアの神殿がエジプトの墓を覆っているかのようである [Mark 1998: 59]。先述した Abydos U-s 号墓のセレクに描かれたように、扶壁建築が Naqada III 期中期の段階からエジプトで用いられていたとすれば、そのように不釣り合いな様相は呈しないと見るのが妥当ではなかろうか。

この点は、その Abydos 自体に築かれた建造物を例にとって見ても明らかである。第 1 王朝の王墓に先行する、先王朝時代末期 U-j 号墓のプランは、第 1 王朝初めの Aha 王墓よりも複雑な構成を示している。これは、第 1 王朝の開始と共に王の葬祭周壁が新たに数キロ離れた地点に設けられた結果、墓の機能が一部そちらに移ったためとも考えられるが、それでもその Aha 王に比定される葬祭周壁は、扶壁を持たない、四隅が突出する構造でしかない。Naqada の Neithhotep 墓に類似した複雑な扶壁は、Abydos では次の Djer 王の葬祭周壁からしか発見されていないのである [O'Connor 1989]。

更に、王宮の門ではないかとされる Hierakonpolis の扶壁も、非常に複雑な壁龕パターンを呈しているが、同じく扶壁を有する第 1 王朝の Saqqara に築かれた王族墓と比較すると、時期は恐らく第 1 王朝の前半に推定される。幅 1 m 80 cm、奥行 1 m 20 cm の大型壁龕は、Saqqara では第 4 代の Den 王期あたりに築かれた墓の壁龕に近い [中野 1999: 45]。したがって、複雑な扶壁建築は王朝開始以降に初めて建造された可能性が高く、少なくとも現在までに得られている情報からは、それ以前に精巧な建築が存在したとは想定し難いと言える。

2 図 像

次に、扶壁建築の登場は第 1 王朝の開始以降であった可能性が高いという点を念頭に、セレクに描かれた意匠についてもその変遷を整理してみよう。セレクの編年を最初に行ったのは Kaiser で、彼は 3 段階に区分している [Kaiser 1964; Kaiser & Dreyer 1982]。まず Horizon A と名づけられた初期の段階では、Horus が 2 羽止まる例が見られ、このセレクには鳥の体や王名を記す部分に斑点模様が描かれる。扶壁は縦線書きで、中には王名らしき文字が横線 1 本で記されるか、全く記されていない。次の Horizon B は、Ka 王、Narmer 王へと続く先王朝時代末の王に属するセレクである。Horus 神は 1 羽になるが、扶壁は引き続き縦線で描かれる。前段階に存在した斑点模様が消失し、Ka 王のセレクにおいて王名と扶壁の上下関係が逆転する例が見られる点が興味深い。hedju や heqa のサインが見られるセレクも、この段階に位置付けられる。そして最後の Horizon C は、第 1 王朝の Aha 王以降のセレクである。以降はホルスが枠の上に止まり、王名と扶壁が整然と描かれる例が増加する。

なお、この Kaiser のセレク編年に関しては、近年 Brink が完形の土器を使って幾つかの修正を試みると共に、4 段階の枠組みを新たに設定している [Brink 1996]。それによれば、

Horizon A は Type I と Type II の 2 つの段階に分けられ、Horizon B も Type III と Type IV とに分割される。注目すべきは、かつて Horizon A に分類されていた、hedju サインを扶壁意匠の代わりに用いた Turah の事例で、新たな編年では Naqada III 期の後期に置かれる。更には、Kaiser の編年には見られない東部デルタのセレクも同じ Naqada III 期の後期に位置付けられ、西部砂漠の岩窟碑文で確認された王のセレクも第 1 王朝直前に比定され、Hierakonpolis の人物ではないかとの推測がなされている [Wilkinson 1995, 1999: 56]。

細かな差異はあるものの、双方のセレク編年に共通する点を挙げれば次のようになる。すなわち、Naqada III 期中期におけるセレク初登場の際に Horus 神は見られないものの、後期初めには 2 羽が向かい合う形で止まるようになり、やがて 1 羽に減少する。加えて、当初は扶壁意匠のみで構成されていたセレクが、次第に上半分に王名を記す空間を有するようになり、第 1 王朝直前には名前が書き込まれる。また Brink の分類によれば、同じく Naqada III 期後期の初めには扶壁意匠の部分に hedju など異なる意匠を有するセレクが現れるものの、第 1 王朝の直前には扶壁が意匠として定着する。したがって、セレクに Horus 神、王名、扶壁意匠の 3 点が揃ったのは第 1 王朝直前のことと考えられ、この時点で王名を明確に記し、自らの王権を強調するメッセージ性をこめた、王名枠としての役割が確立したと推察される。

III Abydos 出土の新資料に見るセレク誕生の前段階

それでは、扶壁を有する建築物が現れたのが第 1 王朝の開始前後で、エジプト王としてのセレクが成立したのがほぼ同じ第 1 王朝の開始直前だったとすれば、それ以前のセレクに描かれた扶壁文様は一体何を表しているのだろうか。近年明らかになった、第 1 王朝の王墓地に先行する Abydos U-j 号墓出土の新資料にその手掛かりを見出してみたい。

1 壁のスリット構造とセレクの類似

まず第 1 に挙げられるのは、U-j 号墓の構造である (図 3-a)。この墓は、地下式で内壁には日乾煉瓦が用いられ、東西約 7 m、南北約 9～10 m の規模を有している。建造時期は、現在最古のセレクが確認されている同じ墓地の s 号墓より、更に 50 年ほど古い。出土品としてはパレスティナ製の輸入土器が数百点にわたって出土し、「支配(権)」を意味する「heqa」と呼ばれるヒエログリフの原型ともなった王笏が発見されたことから、第 1 王朝の王に先行するアビドスの首長と見なされている⁶⁾。墓の内部には 12 の部屋が設けられ、互いの部屋は日乾煉瓦壁で仕切られていた。注目すべきは、その壁の幾つかに掘り込まれた、計 12 点の溝状スリットの存在である (図 3-b)。このスリットは縦長で、高さが 1 m 強、

6) 調査者の Dreyer は既に全国的な支配を有していたと主張するが、U-j に続く Abydos の墓は、むしろ第 1 王朝に至るまで規模、副葬品共に縮小傾向にあり、そう結論付けるのは時期尚早と思われる。

幅が数 cm から 15 cm 程の形状を呈しており、各部屋を結ぶような形で、壁の底部から上部に向かって、1点から3点ずつ櫛歯状に開けられていた。頂部には、マット等何か布状のものを垂らしたと推測される木材痕が水平方向に残存している。調査者の Dreyer は、このスリットの用途について被葬者のカーが移動するためのものと述べているが [Dreyer 1998: 6], そのスリットが空けられた壁の形状は、まさにセレクに描かれた、扶壁と考えられる構造の描写に類似していると見ることができるのである⁷⁾。

「セレク」という語は、古代エジプト語で「知らせる」、「出現する」といった意味を有する語である [O'Brien 1996: 124-125]。大著『墓制の発展』を表した Reisner は、扶壁が表す王宮ファサードを当時の王宮の門から派生した意匠と位置づけ、その役割について 1) 被葬者や副葬品を破壊等から守るため、2) 死者の魂に定期的な食糧供給を可能にするためと述べると共に、その機能はやがて第2王朝へ移るに従い、南北2つの壁龕に集約されると述べた [Reisner 1936]。後の古王国のmastaba墳に見られるように、埋葬された死者のカーが供物を受け取ることができるよう、壁龕が偽扉として用いられたことは良く知られる事実である。よって、このスリット構造は壁龕とは構造が異なるものの、その概念や役割についてはほとんど同一であると考えて良いであろう。すると、Dreyer がカーが通り抜ける場所と解釈したこの構造こそが、魂が「出現する」場所という、セレクの原型だった可能性を想定することはできないだろうか。

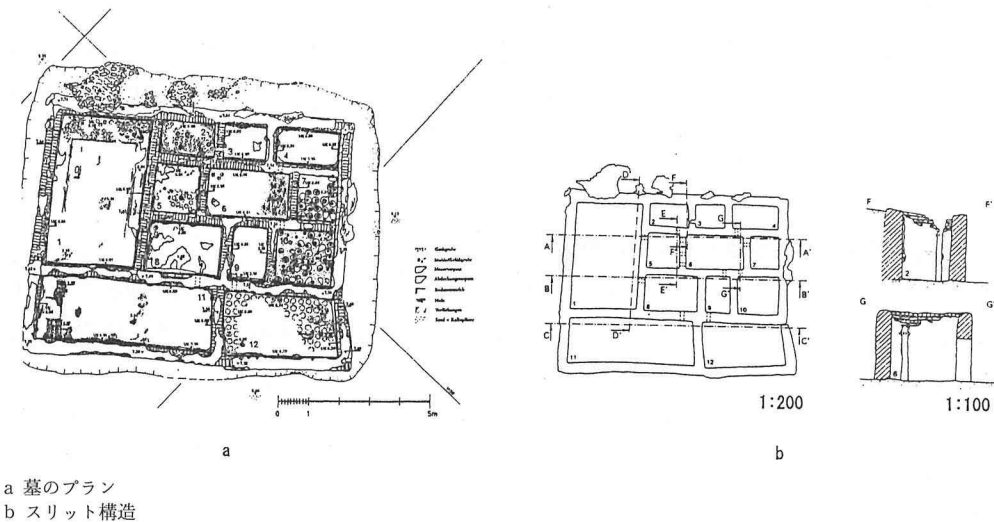


図3 Abydos U-j号墓の構造

7) なお Dreyer はこの墓のプランを当時の王宮を模したものと考え、復元図を示している [Dreyer 1998: 7-Abb. 5]。ただし、その図では日乾煉瓦で構成された扶壁が外面に使われておらず、扶壁が王宮に用いられたのは、やはり第1王朝開始以後との推測が感じられて興味深い。

では、セレクの原型をカーの通り抜ける扉と捉えた場合、その上に立った状態で描かれる Horus 神は一体何を意味しているのだろうか。一般には、王宮における王の存在を示すとされるが、ここでは、そのような考え方が生まれる以前に、墓や恐らくは葬祭周壁の内部から外部へと、自由に行動できる力を有した王、すなわち、後に扶壁となる壁のスリットから現れた姿を表したのが Horus 神であった可能性を挙げておきたい。事実、Abydos U 墓地に隣接する、第1王朝の王墓地にある Djer 王墓では、墓内に亡くなった王の安寧を意味する、「sa」の文字を記した [Adams 1994]、赤い壁龕状の壁が設けられ、初期の偽扉（被葬者の魂が出入りする扉）と見なされている [Petrie 1901: 8]。このように、Abydos 以外その他墓地からスリットの出土例が見られないことを考えても、自由に行動するカーの力を認められていた（認めていた）のは、現時点での資料状況から考えれば、少なくとも先王朝時代末期の段階では Abydos の首長のみだったのではなかろうか。

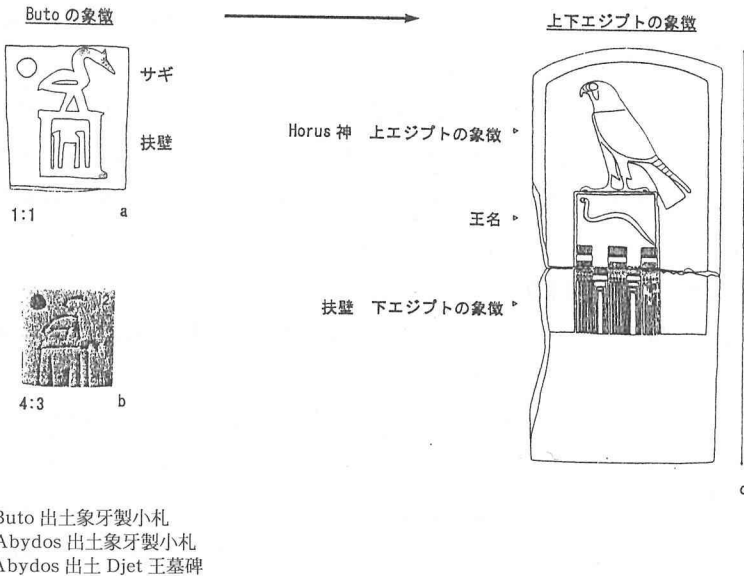
Abydos の王が開いた第1王朝における建築上の革新は、複雑な壁龕を有する日乾煉瓦製の大型建築物を地上に設けたことであった。その際に、同じく煉瓦を用いたメソポタミアの神殿が参考にされただろうことは疑いがないであろう。それを抵抗なく受け入れることができた背景には、単に建築上の先端技術を採り入れるだけでなく、神が住まう神殿の建築様式を、王を始めとするエリート層の建築に利用したいという欲求、そしてここで述べた、壁龕が、死者のカーが建物の内部から外部へ自由に行動できる構造に類似する、と見なした心理的要素も多分に含まれていたと考えるべきではなかろうか⁸⁾。

2 象牙製小札に描かれたセレク状意匠

それでは、扶壁建築はやはり第1王朝の直前に突然現れたものなのだろうか。ここでは先に紹介した、同じ Abydos の U-j 号墓から出土した象牙製小札に着目してみたい (図4-a) [Dreyer 1998: 128, 130-Abb. 80, 127]。既に述べたように、この小札に刻まれたセレク状の意匠に止まった鳥は、Horus ではなくサギを表しているとされるため、従来のセレク区分には含まれていないものの、そこにはセレクや扶壁建築の起源を考える上で重要な、もう一つの情報が含まれているように思われるのである。

サギは、下エジプトの有力拠点である Buto に存在した、Djebaut 神殿の象徴とされる [Wilkinson 1999: 317-320]。先述したように、同地において扶壁建築状の遺構が確認されるのは、第2王朝に入って以降のことであるものの、その扶壁は、Naqada 等に見られる複雑さは呈さない、短い控え壁的なものが付けられているに過ぎない (図2-d)。したがって、この J 号墓出土の小札に描かれた扶壁が表す建物は、現在出土している遺構とは異なると考えられよう。そこで注目されるのは、同じ遺跡の Naqada II 期後期の層などから出土

8) 魂の移動を示す更なる証拠の可能性として、Abydos の Den 王墓 (第1王朝) にある、王像を配置したとされる空間が、1 km ほど離れた所に建てられた葬祭周壁の方角を向いている点を挙げておきたい [Dreyer 1990: 78]。



- a Buto 出土象牙製小札
 b Abydos 出土象牙製小札
 c Abydos 出土 Djet 王墓碑

図4 セレクの構成とその原型

した土製釘の存在である (図2-e, f)。この釘は、神殿の外を飾っていた装飾模様を構成していたと推定されるもので、Uruk の神殿建築に用いられたものと類似している。したがって、実際の建築そのものは未出土なものの、何らかの扶壁建築的なものが既に存在した可能性は否定できない。ただし、第2王朝の層から発見されている遺構が、そのような釘を用いた建築ではないことから判るように、調査主任の Way は、それが存在したとしても、ある特定の限られた目的に使われたもので、建物自体の規模はそれほど大きくはなかったのではないかと考えを示している。事実、Buto は近東との交易が盛んな町であったとされるため、この建造物は彼の言うように、メソポタミアからやってきた交易従事者らが建てた神殿だった可能性もあろう [Way 1992: 223]。いずれにせよ、このサギの乗った意匠は第1王朝に入ってからの Horus 神が乗ったセレクとは異なり、先王朝時代末の Buto における一建築物をモチーフ化したものと推察するのが妥当である⁹⁾。

では、Buto の建築をモチーフ化したこの意匠と、後の Horus 神が止まったセレクとの間

9) なお、近年 Faltings は Buto の層位について年代観を再検討すると共に、本稿で採り上げた一連の土製釘に関しても、12点中 (図2-e) 4点のみが Buto II b 層 (Nagada II d₁ 期) で他は初期王朝時代に属するため、この種の釘を用いた建築存在の可能性は低いと述べている [Faltings 1998]。しかし、彼女自身が認めているように、今後の調査によってそれが発見される可能性も否定できず、最も精巧な図2-fの遺物は、それに遡る Buto I 層に属する可能性が高い。筆者としては、Faltings の言う、デルタ地帯の他の遺跡からその種の建築物が出土しないから扶壁建築が存在しないと考えるのではなく、むしろ、本文図4に示したような Buto 特有の扶壁建築状の意匠が、Nagada III 期前期から出土していることを重視し、その種の建築物は Buto にこそ存在したのではないかと考えている。

には、何の関係も見出すことができないのだろうか。この Buto の事例に類似した描写は、同じ Abydos の第 1 王朝初代 Aha 王墓より出土した象牙製ラベルにも見られるため (図 4-b) [Petrie 1901, Pl. III. 12], 少なくとも、鳥が扶壁に止まるといった意匠の構図が、Abydos において引き続き保持されていたことに疑いはない。

だとすれば、その扶壁意匠に止まるサギが Horus 神を示す隼に代わった場合、それは一体何を意味しているのだろうか。Horus 神は元来 Hierakonpolis に本拠地を有し、上エジプトが統合されていく中でその守護神となった、同地域の象徴である。その象徴が下エジプトの中心地である Buto の守護神サギに代わり、Buto の神殿建築を示す扶壁の上に止まると考えれば、それは上下エジプトの象徴を組み合わせた、2 国(地域)の統一を暗示した意匠であると捉えることが可能ではないだろうか (図 4-c)。あるいは Horus 神が上に止まることで、上エジプトによる下エジプトの支配を表した意匠を意味しているのかもしれない。その点に関して、Naqada III 期後期に見られる 2 羽の Horus 神が止まったセレクは、後の Horus 神と Set 神の対立になぞらえられる 2 国の統一を示し、その 2 国自体が Horus 神から産まれたことを暗示するとの解釈がある [Kemp 1989: 51 -Figure 17]。それは先王朝時代末期の石製パレットに描かれるような、二元性描写のペア表現を踏まえた構図とも捉えられるが [Baines 1995: 123], そこに下エジプトを象徴する Buto の扶壁意匠が組み合わされていると見れば、セレクに国内統一意匠としての意味を見出すことができるように感じられるのである。

IV セレクの誕生に見る国家統一の過程

近年得られた Abydos U-j 号墓出土の新資料を合わせて考えると、エジプト王の名を記した枠であるセレクに描かれた扶壁意匠には、死者のカーが通り抜ける壁という意味と、下エジプトを象徴する建築様式としての扶壁のあわせて 2 通りの意味が込められていたと推測される。ではそのような意匠を用いたセレクの成立や、扶壁建築登場の背後には、どのような歴史的経緯を読み取ることができるだろうか。

まずセレクに関して見れば、それは近隣の Abydos に葬られた This の王が、下エジプトの Buto を中心とする勢力を取り込んでいった過程で創り上げた意匠である可能性を考えることができよう。土着の Buto-Maadi 文化における土器が、Naqada II 期後期の段階で、上エジプトの Naqada 文化の土器によって劇的な形で取って代わられたことは、近年の Buto における調査によって良く知られている。その背景には、新たなシンボルを取り入れ、王の意匠を開発する動きも付随していたのではないだろうか¹⁰⁾。既に述べたように、初期の

10) This の首長が第 1 王朝開始の際に新しく採用したと考えられるものに、メソポタミアの神殿で用いられたダイヤモンド文 (連続菱形文) の存在を挙げることができる。メソポタミアではダイヤモンド文のみが重視された訳ではなく、様々な文様のうち、エジプト王がダイヤモンド文を選択した可能性が高い。その経緯については稿を改めて論じたいと考えるが、ダイヤモンド文の基本的役割については、拙稿 [Nakano 2000] を参照されたい。

セレクでは Horus 神が 2 羽止まっていたものがやがて 1 羽に減り、中に描かれた扶壁意匠も、hedju サインなどの異なるもので置き換えられることが次第に消滅していく。それは、当初 Naqada や This といった複数の勢力からなる連合体が上エジプトの主体だったのが、やがて This に統合されていく様子を反映していると推察されよう。その一方で、当初は Horus 神を戴かなかった下エジプトのセレクも、やがて一様にそれを有するようになるのは、地方君主の乱立が、次第に This を中心とする上エジプト勢力によって淘汰されていったことを意味しているのかもしれない。その過渡期には、上エジプト側が創ったこの意匠を模倣する、下エジプトの地方君主も存在した可能性があるだろう。

その際、上エジプトが下エジプトへ侵攻した背景に存在した、最大の要因とは一体何だったのだろうか。現段階で筆頭に挙げられるのは、近隣地域からの交易品であろう。Abydos の U-j 号墓からはパレスティナ製の輸入土器が数百点も発見されており、数は減少するものの、第 1 王朝に入ってもエリート層の墓に副葬され続けている [中野 1996 a; 1996 b; Nakano 1998]。土器は多種類に亘るため、必ずしも同じ土地から同種の物を入れて運んだとは限らず、むしろ、パレスティナ内の様々な場所からワインや油など、多種多様な産物を運搬する容器だった可能性が高い。近東との交易地として栄えていた Buto や Maadi といった町に、上エジプトの首長たちが興味を抱いたのは想像に難くないためである。

第 2 に、扶壁建築の成立という観点から見れば、下エジプトを最終的に配下に置いた上エジプトの首長達は、同地域の中心地である Buto に存在した壮麗な扶壁建築を目の当たりにして、それを自らの文化にも採り入れようとするに至ったのだろう。Abydos の先王朝時代墓の事例で判るように、日乾煉瓦そのものは、既に Naqada II 期の段階で上エジプトにおいて用いられていたが、扶壁は用いておらず、地上に建造物を設けていてもそれは方形が主体で、装飾的要素は乏しかったと推測される。それを、国を統一して新たに王朝を開始した際、王宮その他の建築物を煉瓦で、より印象的な形で造るに当たって、真っ先に手本としたのは扶壁を用いた下エジプトの建築ではなかっただろうか。そして、Uruk で用いられたものと類似の土製釘が出土したという事実は、それがエジプト人独自というよりも、何らかの形でシュメール人の力を借りて造られた可能性が高いことを物語っている。最古の扶壁墓である Naqada の Neithhotep 墓は、まさにメソポタミアの神殿が上エジプトの墓にそのまま被さるかのような様相を呈しているが、これは Buto など下エジプトに何らかの形で滞在していたシュメール人が、実際に建築を補助した可能性も考えられよう。

したがって、そのような新建築様式採用の動きは、既にその建築を有していたであろう Buto に対抗するという性格のものではなく、むしろ扶壁を上エジプトにおいて自らの建築に導入しようとするものだったであろう。手間のかかるモザイク釘装飾は廃止され、恐らくは Saqqara の例に見られるように彩色か、あるいは他の何らかの形で Abydos の葬祭周壁にも Uruk に見られるような幾何学文様が添えられたと推測される。またその Saqqara 墓地では、初期の墓の周囲に柱穴が残存する例が幾つも見られるが、それも Buto に見られる

ような椰子の木を植えた跡を示している可能性が高いと考えられる [Bietak 1994: 8]。

なお、そのような新建築導入の契機になった事象が一体何であったのかという問題に関しては、上エジプト最古の扶壁建築である、Naqada の Neithhotep 墓が幾つかの示唆を与えてくれるであろう。この Neithhotep は、第1王朝開始直前の王 Narmer の妻であり、同王朝初代の Aha 王の母とされる人物である。元々先王朝時代末期に勢力を誇っていた Naqada の支配者層の出身で、同じく勢力を誇った This 出身の Narmer と恐らく同盟関係を結ぶ婚姻をした結果、上エジプトの統合が進んだとの見方がなされている [Wilkinson 1999: 70]。

重要なのは、この Neithhotep の名前に見られる Neith が、下エジプトの Buto と並ぶ拠点である Sais の女神であり、その姿は常に下エジプトの赤冠を被った姿で表される、という点であろう。なぜなら、この赤冠は元々 Naqada に起源があったと考えられており、同地出土の Naqada I 期の土器にその例を見ることができるためである [Ashmolean Museum no. 1895.795; Payne 1993: 94 – fig. 34.774]。ただし、著名な Narmer 王のパレットに見られるように、第1王朝開始の頃までには国の北方である下エジプトを意味するようになったと考えられ、その間に Buto を中心とする下エジプトと Naqada との関係が何らかの形で深まった可能性が強い。第1王朝の王妃には、Djet 王の妻とされている Herneith や Den 王の母である Merneith など、Neith を用いた名前が多く見られ、王家において重要な地位を占めていた。恐らくはそのような下エジプトとの関連の強さが、下エジプト様式の扶壁を用いた墓を、上エジプトでまず Naqada に出現させた理由の一つだったのではないだろうか。

おわりに

メソポタミア起源の扶壁がなぜエジプトの王に利用されたのか、という問題は、王名牒であるセレクの変遷と、扶壁建築のあり方とを考察することでその手掛かりを見出すことができそうである。現在得られている資料をもとに考えれば、扶壁建築は先王朝時代末の少なくとも Naqada III 期前期の段階にはメソポタミアから下エジプトの Buto に伝わっていて、そこで神殿など特殊な建築物に用いられていた。その後、第1王朝直前の段階になって、その地を最終的に征服した This を中心とする上エジプトの勢力が、自らの煉瓦建築に利用するに至ったのである。なお、土器に記された最初期のセレクに現れる扶壁は、元々下エジプトを象徴する意匠として使われていた可能性が強く、その後、時間を経るに従って Horus 神がその上に止まる形で示されるようになり、その結果、上エジプトの Horus 神と下エジプトの扶壁とを組み合わせ、2国統一の意匠が創り上げられたと推察される。

先王朝時代末期の Naqada III 期において、国内がひどい内乱状態にあったことを示唆するような考古学的証拠は未だ得られておらず [Midant-Reynes 2000: 238–247]、恐らくは比較的平和裏のうちに国内の統一が進んだと考えられる。であるなら、それを成し遂げた

Thisの首長達に備わっていた政治力とは一体何であったか。本稿で論じたセレクの誕生を引き合いに出せば、それは上エジプトで覇権を握った際には、対立していた町 Hierakonpolis の Horus 神を新たな守護神とし、下エジプトを治めた際には、中心地 Buto の扶壁建築を自らの葬祭建築に採用する、というように、相手の文化を巧みに取り入れる力を彼らが有していたことではなかつたらうか。

ただし、上エジプトの王は下エジプトの扶壁建築をただ闇雲に採用した訳ではなかつた。そこには、メソポタミアで神殿に用いられた扶壁を、葬祭を司る聖なる空間に利用することで、自らの神格化を図ろうとする意図、そして、元来自分達が信じていた、墓内を自由に行き来できる被葬者の魂、「カー」の力を可能にする建築様式に扶壁が成り得るとの認識が存在したのである。

では、そのように他勢力の文化を採りいれながら国を統一した彼らにとっての、最大のアイデンティティとは一体何であったのか。それは、新首都の Memphis ではなく、出身地である This 近郊の Abydos に自らの王墓地を設けたことにあった。古代エジプトにおいて、墓の存在は来世での永遠の生を享受するために絶対的に重要である。それを故郷に求め、墓自体には扶壁を用いず、上エジプトの伝統的な建築様式を貫いたところに、国内を統一して第1王朝を開いた、最初のエジプト王の特徴を見出すことができるように思うのである。

[謝辞] 本論文は、筆者が日本学術振興会特別研究員として英国 Oxford 大学 Griffith Institute にて在外研究中に執筆したものです。その間、同大学エジプト学教授 Dr. John Baines には本論文の様々な箇所についてご教示を賜りました。また京都大学名誉教授の小野山節先生には、本稿で扱った扶壁を始め、多くの点でご教示並びにご指導を頂きました。ここに記して厚く御礼申し上げますと共に、文責は全て筆者にある旨を明記し、今後はここで示した見方を他の資料を用いて検証していく所存であることを付記しておきたいと思います。なお、図の出典は全て本文中に示しました。

参考文献

- ASAE: *Annales du Service des Antiquités de l'Égypte*.
 BASOR: *Bulletin of the American Schools of Oriental Research*.
 GM: *Göttinger Miszellen. Beiträge zur Ägyptologischen Diskussion*.
 JARCE: *Journal of the American Research Center in Egypt*.
 JEA: *Journal of Egyptian Archaeology*.
 MDAIK: *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo*.
 ZÄS: *Zeitschrift für Ägyptische Sprache und Altertumskunde*.
- Adams, B. (1994) Possible s 3-signs from the tomb of Djet (Uadji). *JEA* 80, 183–7.

- Arnold, D. (1997) Royal Cult Complexes of the Old and Middle Kingdoms. In: Shafer, B. E. (ed) *Temples of Ancient Egypt*. New York, 31 – 85.
- Baines, J. (1995) Origins of Egyptian Kingship. In: D. O'Connor and Silverman, D. (eds) *Ancient Egyptian Kingship*. Leiden, 95 – 156.
- Bietak, M. (1994) Zu den heiligen Bezirken mit Palmen in Buto und Sais – Ein archäologischer Befund aus dem mittleren Reich. In: Bietak, M. et al. *Festschrift Gertrud Thausing*. Wien.
- Brink, E.C.M. van den (1992) Preliminary report on the excavations at Tell Ibrahim Awad, seasons 1988 – 1990. In: E.C.M. van den Brink (ed) *The Nile Delta in Transition: 4th–3rd Millennium BC*. Tel Aviv, 43 – 68.
- Brink, E. C. M. van den (1996) The incised serekh-signs of Dynasties 0–1. In: J. Spencer (ed) *Aspects of Early Egypt*. London, 140 – 58.
- Clédat, M. J. (1914) Les vases de el-Beda. *ASAE* 13, 115 – 121.
- Damerji, M. (1973) *Die Entwicklung der Tür- und Torarchitektur in Mesopotamien*. (ムアイヤッド S.B. ダメルジ著, 高世富夫・岡田保良 編訳 (1987) 『メソポタミア建築序説 ——門と扉の建築術——』 国士舘大学イラク古代文化研究所)
- Dreyer, G. (1990) Umm el-Qaab. Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof. 3 / 4 Vorbericht. *MDAIK* 46: 53 – 90.
- Dreyer, G. (1992) Horus Krokodil, ein Gegenkönig der Dynastie 0. In: Friedman, R. and Adams, B. (eds) *The Followers of Horus. Studies Dedicated to Michael Allen Hoffman*. Oxford, 59 – 63.
- Dreyer, G. (1998) *Umm el-Qaab I. Das Prädynastische Königsgrab U-j und seine frühen Schriftzeugnisse*. Mainz.
- Eigner, D. (2000) Tell Ibrahim Awad: Divine Residence from Dynasty 0 until Dynasty 11. In: *Ägypten und Levante–Internationale Zeitschrift für ägyptische Archäologie und deren Nachbargebiete*. X. Wien.
- Faltings, D. (1998) Recent Excavations in Tell el-Fara'in/Buto: New Finds and their Chronological Implications. In: Eyre, C. J. (ed) *Proceedings of the Seventh International Congress of Egyptologists*, 365 – 375. Leuven, Peeters.
- Faltings, D. et al. (2000) Zweiter Vorbericht über die Arbeiten in Buto von 1996 bis 1999. *MDAIK* 56, 131 – 179.
- Fischer, H.G. (1963) Varia Aegyptiaca. *JARCE* 2, 17 – 51.
- Frankfort, H. (1941) The Origin of Monumental Architecture in Egypt. *American Journal of Semitic Languages and Literatures* 58.
- Frankfort, H. (1951) *The Birth of Civilization in the Near East*. Bloomington.
- Jeffreys, D. & A. Tavares (1994) The historic landscape of Early Dynastic Memphis. *MDAIK* 50, 143 – 173.

- Junker, H. (1912) *Bericht über die Grabungen der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften in Wien auf dem Friedhof in Turah. Winter 1909–1910*. Wien.
- Kaiser, W. (1957) Zur Inneren Chronologie der Naqadakultur. *Archaeologica Geographica* 61, 67–77.
- Kaiser, W. (1964) Einige Bemerkungen zur ägyptischen Frühzeit. III. *ZÄS* 91, 36–125.
- Kaiser, W. (1985) Zu Entwicklung und Vorformen der frühzeitlichen Graber mit reich gegliederter Oberbaufassade. In: *Mélanges Mokhtar* II, 25–38. Cairo: IFAO. Bibliothèque d'Etude 97.
- Kaiser, W. & G. Dreyer (1982) Umm el-Qaab. Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof. 2. Vorbericht. *MDAIK* 38, 211–69.
- Kantor, H. (1965) The relative chronology of Egypt and its foreign correlations before the late Bronze Age. In: Ehrich, R. W. (ed) *Chronologies in Old World Archaeology*. Chicago, 1–46.
- Kemp, B. J. (1989) *Ancient Egypt. Anatomy of a Civilization*. London and New York.
- Köhler, E. (1992) The Pre- and Early Dynastic pottery of Tell el-Fara'in (Buto). In: Brink, E. C. M. van den (ed) *The Nile Delta in Transition: 4th–3rd Millennium BC*, Tel Aviv, 11–22.
- Köhler, E. (1999) Re-assessment of a Cylinder Seal from Helwan. *GM* 168, 49–56.
- Levy, T. E. et al. (1997) Egyptian-Canaanite Interaction at Nahal Tillah, Israel (ca. 4500–3000 B. C. E.): An Interim Report on the 1994–1995 Excavations. *BASOR* 307, 1–52.
- Mark, S. (1998) *From Egypt to Mesopotamia. A Study of Predynastic Trade Routes*. London.
- Midant-Reynes, B. (2000) *The Prehistory of Egypt: From the First Egyptians to the First Pharaohs*. Oxford.
- Morgan, J. de (1897) *Recherches sur les Origines de l'Égypte*. II. *Ethnographie Préhistorique et Tombeau Royale de Négadah*. Paris.
- Nakano, T. (1998) Abydos Ware and the Location of the Egyptian First Dynasty Royal Tombs. *ORIENT* XXXIII, 1–32.
- Nakano, T. (2000) An Undiscovered Representation of Egyptian Kingship? : The Diamond Motif on the Kings' Belts. *ORIENT* XXXV: 23–34.
- 中野智章 (1996 a) エジプト第1王朝の王墓地比定に関する一試論——輸入土器からの視点——『オリエント』39(1), 19–40.
- 中野智章 (1996 b) エジプト第1王朝におけるパレスティナ土器の型式編年研究『南山大学大学院考古学研究報告』7, 1–48.
- 中野智章 (1999) 『古代エジプト第1王朝における王墓地論——サッカラ墓地の研究を中心に』南山大学大学院博士論文(未出版).
- O'Brien, A. A. (1996) The Serekh as an Aspect of the Iconography of Early Kingship. *JARCE* XXXIII, 123–138.

- O'Connor, D. (1989) New Funerary Enclosures (Talbezirke) of the Early Dynastic Period at Abydos. *JARCE* XXVI, 51–86.
- O'Connor, D. & D. Silverman (eds.) (1995) *Ancient Egyptian Kingship*. Leiden.
- 小野山節 (1975) エジプト初期王朝期の王墓『古代オリエント研究会学報』(古代オリエント研究会) 1, 29–32.
- 小野山節 (1996) メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像——そのエジプト的要素——『西南アジア研究』44, 1–14.
- 小野山節 (1997) メソポタミアとエジプト——紀元前三千年期の交流とジルベール説の当否——『西南アジア研究』47, 39–52.
- 小野山節 (1999) 五千年前のシュルレアリスム思潮——比較考古学による新しい時代区分の試み『複雑系としてのイェ』(Historia Juris『比較法史研究』——思想・制度・社会8) 未来社.
- Payne, J. C. (1993) *Catalogue of the Predynastic Egyptian Collection in the Ashmolean Museum, Oxford*. Oxford.
- Petrie, W. M. F. (1901) *Royal Tombs of the Earliest Dynasties. II*. London.
- Petrie, W. M. F. (1902) *Abydos I*. London.
- Petrie, W. M. F. (1914) *Tarkhan II*. London.
- Petrie, W. M. F. (1939) *The Making of Egypt*. London.
- Petrie, W. M. F., Wainwright, G. A. & Gardiner, A. H. (1913) *Tarkhan I and Memphis V*. London.
- Reisner, G. (1936) *Tomb Development down to the Accession to Kheops*. Cambridge, Mass.
- Saad, Z. (1947) *Royal Excavations at Saqqara and Helwan*. (1941–1945). Cairo.
- Strommenger, E. (1980) *Habura Kabira—Eine Stadt vor 5000 Jahren*. Mainz.
- Vandier, J. (1952) *Manuel d'archéologie égyptienne. 1. Les époques de formation. Les trois premières dynasties*. Paris.
- Way, T. von der (1992) Indications of Architecture with Niches at Buto. In: *The Followers of Horus: Studies dedicated to Michael Allen Hoffman*. Egyptian Studies Association Publication 2. Oxbow Monograph 20. Oxford, 217–226.
- Way, T. von der (1993) *Untersuchungen zur Spätvor- und Frühgeschichte Unterägyptens. Studien zur Archäologie und Geschichte Altägyptens* 8. Heidelberg.
- Way, T. von der (1997) *Tell el-Fara'in-Buto. I. Ergebnisse zum frühen Kontext; Kampagnen der Jahre 1983–1989*. Mainz.
- Weeks, K. (1971–2) Preliminary report on the first two seasons at Hierakonpolis. II: the Early Dynastic palace. *JARCE* 9, 29–33.
- Wignall, S. J. (1998) The Identification of the Late Prehistoric Serekh. *GM* 162, 93–105.
- Wildung, D. (1981) *Ägypten vor den Pyramiden*. Münchner Ausgrabungen in Ägypten. Mainz.
- Williams, B. (1986) *Excavations Between Abu Simbel and the Sudan Frontier. The A-Group Royal Cemetery at Qustul: Cemetery L*. The Oriental Institute of the University of Chi-

- cago. Oriental Institute Nubian Expedition III. Chicago.
- Wilkinson, T. (1995) A new king in the Western Desert. *JEA* 81, 205 – 210.
- Wilkinson, T. (1999) *Early Dynastic Egypt*. London.
- Wilkinson, T. (2000) Political Unification : towards a reconstruction. *MDAIK* 56, 377 – 393.
- Winkler, H. A. (1938) *Rock-Drawings of Southern Upper Egypt, I*. London.

(日本学術振興会・名古屋大学文学部)